令和6年度 日本大学スポーツ科学部 個人研究費 研究実績報告書

所属: スポーツ科学部 競技スポーツ学科

資格: 教授 氏名: 青山 亜紀

研究課題名	東欧圏における「アスリートの準備に関する一般理論」の学問的発展過程について
研究目的及び 研究概要	近年日本において、様々な知を融合させて諸問題の解決を図る「総合知」活用の機運が高まっている(内閣府HP,2022)が、スポーツ科学では冷戦後の東欧諸国におけるエリートスポーツ政策により誕生した「アスリートの準備における一般理論」がその先駆けとして存在していた。この理論は、アスリートの潜在能力を最大限に発揮させ、最重要試合での最高の結果達成を目的とした、アスリートの準備プロセスの合理的な構築の全体的な見解を示すものであり、トレーニング現場で生じる諸問題を実践から帰納的に抽出し、異なる学問分野や科学的アプローチの枠組みの中で蓄積された膨大な経験的・理論的知識を取り入れ体系化されたことに重要な意義があると考えられる(朝岡,2017)。このことはスポーツ科学の発展史の観点からみると自然科学に偏重した欧米のそれとは異なり極めて特徴的であり、これはまさに「総合知」の先駆けの理論であると考えられる。本研究では、東欧圏における「アスリートの準備に関する一般理論」の学問的発展過程を明らかにすることで、日本における各研究領域の「総合知」創出のためのモデルケースとし、「総合知」の社会への浸透に寄与することを目的とするものである。
研究実績の概要研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	1. 研究の進捗状況 本研究課題を解決するためには、東欧圏において「アスリートの準備に関する一般理論」がどのように発展してきたのか、その経緯を詳細に調査することが必要となる。そのための方法として、ロシア語圏における当該問題に関連する文献を分析することが必要であった。 昨年度はウクライナの一部文献を調査し一定程度の成果を挙げることができたので、今年度は、選手の多年準備プロセス構築における研究上の重要な問題である「オリンピックサイクルの構築」について焦点を絞り分析を実施した。「オリンピックサイクル」は、選手の多年準備プロセス構築における重要課題に挙げられているにもかかわらず、先行研究ではその構築に関する具体的な方法について詳細に検討されているケースは非常に限られている(Самоленко, 2016)。したがって本研究では、主に東欧圏を中心とした研究者(Вотра, Рубин, Платонов, Самоленко)による、オリンピックサイクル構築に関する近年の研究動向を整理することを試みた。その成果については、日本体育・スポーツ健康学会第74回大会(福岡大学)にて発表した。
	2. 得られた成果 オリンピックに競技力のピークを合わせるためには、競技力形成プロセスを4年間という一つの大きな単位として捉え、単年次のみならず多年次におけるトレーニングの方向性を明確化することが重要となる。そのうえで、各年次に配当するピリオダイゼーションを戦略的に選択する必要がある。このように、「オリンピックサイクル」は選手の多年準備プロセス構築における重要課題に挙げられているにもかかわらず、近年の高度化したスポーツ科学においても、最適なオリンピックサイクル構築の方法論は未だ確立されているとは言い難い状況にあることが明らかとなった。
	3. 今後の課題 非常に限定的ではあるものの、近年の研究においてオリンピックサイクルについての事例が示されている。今後は、公開されている各選手の様々な状況における事例を分析し、多様なモデルの提示が急務となると考えられる。